

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580180

研究課題名(和文) 花祭の発展的継承と地域文化の多様性保全に向けた社会シナリオの創出

研究課題名(英文) A Study on the cyclical scenario for the conservation of the Hanamatsuri and the diversity of local traditional cultures

研究代表者

佐々木 重洋(SASAKI, Shigehiro)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：00293275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、花祭の発展的継承を起点としつつ、相互信頼と連帯に支えられた地域社会の再構築、この地域社会・住民集団による積極的な森林資源の適切な管理・利用、それによる新たな商機と雇用の創出、そのための新しいバイオ技術、CO2排出権取引等の導入、医療設備も含めた地域インフラの再整備を見越した社会シナリオの考案に挑戦した。花祭伝承者、自治体関係者などと共同で花祭の現代的意義を再考するとともに、花祭の発展的継承を起点に同地域の社会的・経済的活性化と多様な人材の定着化、地方の過疎化・高齢化問題の改善、環境保全や持続的社会実現へと向かう社会シナリオについて、萌芽的な知見と示唆を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：This study challenged to provide some prospects and cyclical scenarios for reconstruction of the local community supported by its member's mutual trust and solidarity, sustainable management and use of forest resources by this kind of local community, economic development which will be attained by appropriate use of these forest resources, a new idea of local cooperation on environmental problems as well as making and applying new environmental laws for the benefit of the inhabitants of hinter mountainous region, improvement of social infrastructure of those villages and towns in that region, and so on, starting from supporting of well conditioned succession of local intangible cultural heritage in Oku-Mikawa region, Japan. This study was carried out as a collaborative work with the practitioners of a local intangible cultural heritage ( the Hanamatsuri ), 4 local governments and other stake holders in this region, and could get certain materials as well as interesting suggestions.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 花祭 中山間地域 愛知県奥三河地域 社会シナリオ

## 1. 研究開始当初の背景

花祭は、折口信夫や早川孝太郎によってその学術的価値を見出されて以来、もっともよく知られた民俗芸能の研究対象のひとつとなってきた。その花祭が今日、伝承地における過疎化、高齢化と継承者人口の減少により、存亡の危機に直面しつつある。これに対し、応募者も現地保存会と協力して花祭資料の記録保存を開始した。ただし、資料の記録保存は当面可能な最低限の対処にすぎず、花祭の廃絶を抑止する根本的な解決にはならない。民俗芸能としての花祭に関する知見自体は深まっており、最近だけでも、山崎一司(2007,2012)による花祭の発生と伝播に関する研究、井上隆弘(2004)による舞の構造分析、中村茂子(2003)による明治以降の変遷を追った研究などがある。ただ、花祭研究の多くは過去に関心を向けがちであり、例えば現在の花祭とそれを支える地域社会の生活基盤の関係を問い直す視点は乏しい。しかし、花祭の危機の問題は地域社会の変貌、地域経済の衰退などとも密接に関連しており、民俗行政の管轄範囲を超えているうえに、研究、行政ともに関連する部門、例えば文化財保護、教育、地域振興は相互に連携を欠き、対策は個別的・断片的なものにとどまっている。こうした現状を招いた原因を、近代社会システムの批判的検討も視野に入れつつ根本的に解明し、刷新し得る方途を探求する必要がある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的はまず、花祭の発展的継承を起点としつつ、相互信頼と連帯に支えられた地域社会の再構築、この地域社会・住民集団を母体とした森林資源の適切な管理・利用体制の整備、それによる新たな商機と雇用の創出、そのための新しいバイオ技術、CO<sub>2</sub>排出権取引等の導入、医療設備も含めた地域インフラの再整備を見越した社会シナリオの考案に挑戦することにある。

花祭伝承者、自治体関係者などと共同で花祭の現代的意義を再考するとともに、花祭の発展的継承を起点に同地域の社会的・経済的活性化と多様な人材の定着化、地方の過疎化・高齢化問題の改善、環境保全や持続的社会実現への見通しを得る。花祭の存続、ひいては地域文化の多様性を保全し得る次代の社会システム構築への足がかりを提示することが最終的な目標である。

## 3. 研究の方法

花祭保存会、地域関係者、研究者、自治体関係者らと共同で以下の作業を実施する。

- (1) これまでの花祭に関する研究の成果と限界を批判的に再検討する。また、近代以降の花祭の変遷を跡づけるとともに、花祭への国民の視線の歴史を、行政史も含めて再検討する。
- (2) 花祭の継承策について議論するとともに、花祭が持ち得る文化的、芸術的、社会的、政治経済的、地球環境的意義について、「文化財保護」とは異なる発想から多面的に再考、議論する。
- (3) 花祭の継承をもとにした地域社会の再構築、再構築された地域社会と住民集団による森林資源の適切な管理・利用、それによる新たな商機と雇用の積極的な創出、そのための新しいバイオ技術、CO<sub>2</sub>排出権取引等の導入のほか、医療設備なども含めた地域インフラの再整備を盛りこんだ社会シナリオを創出する。

## 4. 研究成果

### (1) 従来の花祭研究の成果と課題の検討

従来の花祭に関する研究は、主として民俗芸能研究、民俗学、芸能史などの分野でおこなわれてきた。すなわち、その民俗芸能としての特色、我が国における芸能史上の位置づけ、成立時における宗教的意義、歌ぐらなどから読み取れる中世の宗教的世界観の解明などである。

これらは、その知見自体は興味深いものも多く、一定の学術的意義を有することは事実である。しかしながら、本研究では、これらの蓄積が花祭伝承者や関係自治体のあいだではさほど知られていない(積極的に読まれていない)こと、花祭伝承者にとっては、これらの研究がそれほど自分たちの伝承行為と深く関連するものではないとみなされる傾向にあること、総じていえば、ごく一部の研究者と個人的に密接な関係をもっていた

伝承者や地域住民をのぞくと、研究成果が十分に花祭関係者や自治体関係者に還元されていないこと、などが明らかになった。その理由はいくつかあげられるが、多くの地域住民にとっては、従来の花祭研究が過去に関する研究であって、要するに趣味の研究、せいぜい歴史研究の一種であり、現在の自分たちにはあまり関係のない事柄を扱っているとみなされがちであったことが問題点として指摘できる。

一方、ジャーナリズムの世界でも、花祭を日本の基層的文化、精神の古層を示すものとして主題化する傾向は依然として強く、こうした視線はいわゆる「ディスカバー・ジャパン」の時代からそう大きく変化していないことも明らかになった。これは近代批判としての側面も持ち得るが、その反面、地方、村落、田舎に関するステレオタイプを再生産し続けかねず、また制作者たちのあいだでも花祭に対する一種のオリエンタリズムが共有され続けていることも問題として指摘できる。研究代表者は研究期間中、2件の花祭ドキュメンタリー番組に関わったが、その際、本研究課題が目的としているような、より現代的かつグローバルな問題を見据えて花祭を取り上げるように努めたが、研究者もこうした努力を多方面で試みる必要が今後、ますます必要になると考えられる。

本研究では、こうした現状を受けて、このような事態を改善するために、研究成果を論考や報告書の形式でただ関係者に送付するだけでは不十分であること、研究成果の公開を兼ねたワークショップの地元開催や、研究成果をよりわかりやすく共有するための仕組みづくりが必要であることを指摘するとともに、花祭伝承者、関係者、自治体職員らとともに研究成果の共有と活用のための試みをいくつか試行した。研究成果を幅広く共有したうえで、その次の創造的活動をさまざまな立場の者が集まって共同でおこなわない限り、研究と現場の乖離は改善されないことは明らかである。

一方、花祭を地域社会や地域アイデンティティの核とみる考え方は自治体でも以前から共有されており、花祭を起爆剤とした地域振興対策についても、昭和53年(1979年)の東栄町花祭会館竣工など、相応に対策と検討が試みられてきてはいたものの、なかなか

思うような成果があがらなかったことも判明した。近年では、ユネスコの世界遺産登録への申請が行政サイドによって検討されているが、花祭保存会や地域住民の側がこれにあまり積極的に賛同しておらず、現時点では登録申請の見通しは立っていない。本研究における調査においても再確認されたが、現状では県レベルでも市町村レベルでも、教育委員会(文化財保護、社会教育など)と、経済課、商工課、企画課などの経済振興を担当する部門が別々に活動しており、花祭の継承と経済振興や地域振興が有機的に連動して追究されているとはいえない。

加えて、地方自治体の場合はとくに、そもそも人員に余裕がないことと、時間的な制約もあって首長からの指示や伝達が関係者に十分に周知されないままに政策が実施されることも珍しくなく、結果として十分な成果が上がらないことがある。

こうした問題に対処するため、少なくとも当面は、花祭の継承と地域振興を同時に視野に入れ、行政でも文化・教育系と経済系双方の部署の参与を得て調査研究と実践をおこなっていくような方法を積極的に選択する必要がある。また、従来以上に、政策決定時に自治体と地域住民のあいだで相互理解を共有するための機会と場を設けることが重要であることも確認され、この点を改善するような仕組みを考察した。

## (2) 今後の花祭の継承策

設楽町、東栄町、豊根村全15地区の花祭伝承地を対象とし、今後の継承策についての意識調査をおこなうとともに、具体的な取り組み例を明らかにした。また、愛知県の地域円卓会議に参加し、三町村の花祭保存会関係者、県職員、NPO法人、有識者、地域住民らとともに、花祭の継承をめぐる現状、課題、各地区の取り組み、今後の目指す方向性などについて議論する過程をとおして、花祭の発展的継承のための社会シナリオの大枠を考究することができた。

本研究においてあらためて浮きぼりになったのは、花祭の継承において、いわゆる「内部者」と「外部者」の区分と、後継者をめぐる血縁主義が依然として根強い一方、地域で進行する過疎化と少子高齢化と、地域住民の意識の変化によって、次第にこの「外部」と「内部」の区分は自明のものではなくなりつつあること、すでいくつかの事例において、従来の区分でいえば「外部者」が、「内部者」的な働きや貢献をおこなっているという事

実である。研究代表者もそうした参与をすでに10年以上、継続しておこなってきている。「外部」/「内部」、伝統/近代化などの二項対立的区分で事態を考察することは、花祭の継承における今後の可能性をめぐる考察や発案の範囲を狭めることになる。

むしろ、花祭をめぐるさまざまなアクターが、さまざまな立場で花祭の継承に関与するようなあり方がすでに一部で進行しており、今後はますますそのような動きが進むことが予測できた。他方、中山間地域の集落において、伝統的な行事や祭礼の実施は、集落機能の維持という点できわめて大きな役割を持っていることも再確認された。こうした伝統行事や祭礼を挙げるには、その準備等も含めると一年をつうじて多くのマンパワーと多様な共同作業を要する。こうした活動の維持は、過疎化と少子高齢化が進む中山間地域では、集落機能の維持という点でとくに重要であること、そのためには、祭礼や伝統行事の挙行が維持されるような体制づくりをまず考えること、その際、マンパワーの地域を超えた活用と、それを起点に中山間地域と都市部などのあいだの人的交流を促進することの重要性が指摘できた。

### (3) 花祭の継承を起点とした地域振興と文化的多様性の保全に向けた循環的シナリオ

祭礼や伝統行事が共同体や社会を結合したり、その結びつきを強化するという考え自体は、今さらここであらためて強調するまでもないことである。しかし、本研究が対象とする中山間地域の過疎・少子高齢化集落の場合、それは集落機能の維持という観点から、より切迫性をもった課題として立ち現れる。すなわち、祭礼が共同体を結びつけるというより、祭礼のおかげでかろうじて共同体が崩壊せずにとどまっている、といったほうが実態を正確にあらわしているといえる。花祭の事例でも、花祭があるからこそ、集落の成員が顔を合わせる機会が確保できているという意見が少なからず聞かれており、地域住民にとっても地域の核となるような祭礼の重要性は十分に認識されている。それを裏づけるように、本研究では、それぞれの集落ごとに工夫を凝らし、継承と存続に力を注いできたことも明らかになった。したがって、祭礼や地域文化は単に文化的多様性の観点から重要であるだけにとどまらず、共同体と集落機能の維持のための起点として見直されなければならないということがあらためて浮きぼりになったといえる。

本研究では、1)文化遺産の保護と文化的多様性の保全、2)相互信頼と連帯に支えられた

地域社会の再構築、3)森林資源の適切な管理・利用体制の整備、4)地域経済振興、5)山間部や後背地への科学技術やCO<sub>2</sub>排出権取引の導入、などを連続的にとらえ、既存の知識や技術を連関的に活用するための方途を探究することを研究の主眼に置いた。研究期間が限られていることもあり、国策レベルにおけるシナリオの検討までは十分に達成できなかったが、奥三河三町村を中心に、自治体レベルでは現行の制度の問題点の指摘も含め、相応に具体的な検討ができた。もちろん、本研究課題は息の長い調査研究を要するものであり、現時点で得られた知見や成果はまだ萌芽的なものも多く、今後の深化発展が課題として残るが、事例研究におけるシナリオの概略を段階に分けて示す。

第一段階：花祭の継承を保存会以外の人材も登用しつつ維持する。そのため、地域内外を問わず、志願者が祭礼の「裏方」として参与できる仕組みを整備し、行政がその窓口となる。保存会と有識者がそれらの人材の派遣を担当する。

第二段階：祭礼の実施を起点とし、都市部と中山間地域の間でのヒトの移動、交流を活性化させる。また、空き家の提供や就労機会の確保なども含め、地域外在住者が、祭礼への参与を契機として将来的な同地域への移住、定住を可能とするような受け入れ態勢を整備する。地域住民の伝統的な村落意識を重視しつつも、外部からの移住者ともども意識上の「共変わり」を徐々に進める。

第三段階：現行の森林組合の機能を強化するとともに、自然資源の有効な活用を商機に結び付けるための調査研究を産・学・官の連携により実施する。それぞれの作業内容に応じて、自然資源を持続的に利用するための科学技術の導入のあり方も検討する。

第四段階：国や自治体による助成金・補助金事業を一部見直し、文化振興と経済振興がセットになって推進できるような仕組みを構築する。

また、現存する政府補助金事業などのより有効な活用も検討する。例えば現行の農政省「都市農村共生・対流総合対策交付金における山村活性化支援対策」の一環として実施されている「山村活性化支援交付金事業」などの採択対象範囲を拡大し、花祭の世界観やイメージを活かした地域の特産品、農産物などの商品化が可能になるようにするとともに、このための人材を地域内外から積極的に登用し、中山間地域に長期にわたって在住

しつつ仕事ができるようにする。現状ではこうした事業の受け入れ先は原則として自治体となっているが、現実には過疎化の進む地域の自治体では人材が不足しており、十分にこうした補助事業を活かすことができていないため、その窓口を拡大し、例えば都市部在住者でも事業実施者になれるように、柔軟な運用を可能にする。

第五段階：中山間地域に在住者が増えた場合、一定の商機が見込める段階になったところで、教育、保健衛生、社会福祉、公共交通におけるインフラを再整備し、若者世代の定着化をはかる。また、森林資源を活用した商機を拡大し、企業の誘致や自営業者の育成を促進する。

第六段階：奥三河中山間地域と平野部、海岸部との間を連続する地域としてとらえ、とくに天竜川をはじめとする河川沿いに上流地域、中流地域、下流地域に分け、住民税や資産税などの課税率を上流に行くにしたがって下げる仕組みを考える。

第七段階：第一段階に循環的に戻りつつ、花祭の運営と実施を地域共同体の再生産の核としながら、より合理的な運営（この段階では、第一段階と比して多様な人材が継承者となっていることが予測されるため）方法と運営ルールを調整する。また、祭礼の運営と実施の過程で、花祭の根底に流れる自然との共生の精神を意識して学べるような工夫を凝らし、自然環境の維持と伝統文化の維持が連続していることを地域内外で広く共有しつつ、積極的に情報発信していく。

この過程を繰り返しつつ、もし、わが国で自然環境問題への関心のさらなる高まりがあれば、Co2 排出権に関する議論なども可能になるであろうし、国全体で森林資源の保存と有効活用に関する施策がすすみ、今以上に若い世代が奥三河のような中山間地域に住もうという機運が高まるかもしれない。

現在の花祭継承者にとって、一番の関心事は後継者の確保である。とくに、若い世代の継承者不足は長年にわたって懸案事項となってきた。もちろん、それは過疎化によるものであるが、これはよくいわれるように同地域に就労機会がないためとばかりもいえない。確かに、就労機会は限られている。しかし、若者たちのなかには、実際には同地にとどまった場合に選択し得る職種が気に入らなかつたり、伝統的な家制度などの影響で都市部に出るケースも少なくない。つまり、過疎化問題における中山間地域のいわばプル要因としては、社会的背景も看過できない。いわゆる村落文化には、現代的に変更を要請される部分もないとはいえないのである。

一方、彼らの親世代や祖父母世代はそれでも自分の家を始末しようとせず、外部者へ間借りにも出さない。つまり、家を維持したがる傾向にある。これは外部者の参入にとっては障害ともなる。現状では、都市部にいった

ん出て就労した人が、退職後リターンしてくるケースは相応にあるため、伝統的な家制度と家自体を維持しつつも、若者が不在となる期間に、どのように集落機能を維持しつつ、しのぐかということが当面の課題となるようにみえる。

本研究では、花祭を「民俗芸能」というくりに限定させず、過疎化、集落機能の維持や自然環境問題などとの関連で取り上げたが、当初の予想どおり、それらのいずれとも密接に関わる／関わり得る対象であること、そのような観点はまだ十分に掘り下げられていないとはいえず、今後も引き続き検討の余地がおおいにあること、地域住民もその展開には関心を有していること、などが明らかになった。今後、本研究で萌芽的に得られた知見をさらに掘り下げ、花祭研究や民俗研究の深化、発展だけでなく、地域社会がかかえる問題と、グローバル化のなかで地球規模で課題となっている自然と文化の多様性の維持について、実効性のある対応策を提示できるように努力を続けていきたいと考える。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 7 件)

佐々木重洋、「奥三河過疎山村地域における伝統文化の継承支援と地域振興に関する地域共同調査研究プロジェクト」、『平成 26 年度地域貢献特別支援事業報告書』、名古屋大学、pp. 40-43、2016 年、査読無

佐々木重洋、「人文学としての人類学の再創造に向けて」、『文化人類学』80 巻 2 号、pp. 172-180、2015 年、査読有

佐々木重洋、「E-P と人類学的思考の歴史」、『文化人類学』80 巻 2 号、pp. 242-262、2015 年、査読有

佐々木重洋、「花祭と伝承資料再考」、『説話・伝承学』第 23 号、pp. 25-32、2015 年、査読有

佐々木重洋、「花祭の継承と映像記録」、『日本民俗学』275 号、pp. 84-90、2014 年、査読有

佐々木重洋（編）、『平成 25 年度地域円卓会議 協働ロードマップ 三河山間地域の小規模高齢化集落の集落機能の維持・再生に向けた新たな仕組みづくりについて - 地域の重要な文化遺産 花祭 を支える - 』、愛知県県民生活部、2014 年、査読無

[https://www.aichi-npo.jp/5\\_NPO\\_shien/1\\_a\\_ichiken/3\\_roadmap/sanson/04/roadmap.pdf](https://www.aichi-npo.jp/5_NPO_shien/1_a_ichiken/3_roadmap/sanson/04/roadmap.pdf) (あいち NPO 交流プラザホー

ムページで公開中)

佐々木重洋、「再評価されるデーモンの『力』の思想」、『鬼・オニ・ONI』(特別展図録+論説)豊橋市美術博物館、2013年、pp. 107-111、査読無

〔図書〕(計 2 件)

佐々木重洋(共著) 宮本瑞夫・佐野賢治・北村皆男・原田健一・岡田一男・内田順子・高城玲(編)、『甦る民俗映像：渋沢敬三と宮本繁太郎が撮った一九三〇年代の日本・アジア』、岩波書店、pp. 137-151、2016年、査読有

佐々木重洋(共著) 名古屋市博物館(編)、『奥三河のくらしと花祭・田楽』、名古屋市博物館、2013年、査読無

〔その他〕

地域円卓会議のファシリテーターおよびロードマップ(政策提言書)の取りまとめ  
「三河山間地域の小規模高齢化集落の集落機能の維持・再生に向けた新たな仕組みづくりについて - 地域の重要な文化遺産 花祭を支える - 」(主催:愛知県県民生活部) 2013年10月~2014年3月

テレビ番組の取材協力と出演

「鬼が舞う! 鬼は神! 人も舞う! ~ 奥三河・天竜の懐に残る花祭~」(BS朝日、2016年6月4日放送)

テレビ番組の取材協力と出演

「鬼になる~奥三河の花祭~」(NHK名古屋放送局、2016年1月29日放送)

ラジオ番組での活動紹介

「らじおガモン倶楽部 ゲスト佐々木重洋(名古屋大学)」(東海ラジオ、2015年1月4日放送)

一般向け普及啓発講演

佐々木重洋、「無形民俗文化遺産の継承と人類社会の未来のはなし」(名古屋大学オープンレクチャー2014、名古屋大学、2015年3月21日)

伝承用動画資料の作成と配布

佐々木重洋(監修)、『国指定重要無形民俗文化財 小林の花祭 愛知県北設楽郡東栄町』、株式会社ヴィジュアルフォークロア製作、2013年、非売品

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐々木 重洋 (SASAKI Shigehiro)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：00293275